様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2019
課題番号：１８Ｋ１２２２５

研究課題名（和文）室町期における「人物故事」と「自然」表象の研究――和漢のことばと絵の交叉から

研究課題名（英文）A Study of the "Legend" and Representations of "Nature" in the Muromachi Period: From the Intersection of Sino-Japan Words and Pictures

研究代表者
宇野　瑞木（Uno, Mizuki）

東京大学・東洋文化研究所・特任研究員

研究者番号：６０７９４８８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：2018年12月23日、24日に、東京大学東洋文化研究所にて、ワークショップ「和漢の故事人物と自然表象――十六、七世紀を中心に」を本科研主催で開催した。本ワークショップは、日本の社会構造的・環境的転換期にあたる十六、七世紀に焦点化し、人々が自身を取り巻く自然環境をどのように感じ、捉え、表象したのか、という問題を、文学、美術、芸能、歴史の専門家が18名登壇して議論した。
この成果に本科研への賛同を示してくれた海外の研究者を加え、総勢18名の論文集として、島尾新、亀田和子氏との共編という形で『和漢のコードと自然表象――十六、七世紀の日本を中心に』（勉誠出版、2020年3月）を公刊することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
現在なお収束が見えない新型コロナウィルス感染拡大、そして2011年3月に東日本を襲った未曽有の大地震・津波及び原発事故による汚染問題は、人文科学研究者においても環境問題をどのように引き受けるか、何をすべきなのか、という問いを突き付けている。本科研の目的は、自然と人間の関係史を、日本の社会構造・環境的転換期である十六、七世紀に注目して、特に文学や美術といった分野から再考する試みであったといえる。

研究成果の概要（英文）：On December 23rd and 24th, 2018, at the Institute for Advanced Studies on Asia at The University of Tokyo, we held a workshop entitled "The Sino-Japan Legend and Representation of Nature: Literature and Art of Japan in the 16th and 17th centuries" sponsored by KAKENHI. This workshop focused on the 16th and 17th centuries, which was the transitional period of Japan's social structure and environment, 18 experts from the field of literature, arts, performing arts, and history discussed the issue of how people perceive, capture, and represent the natural environment surrounding them. A total of 18 papers, including the participants of this workshop and overseas researchers, was published as "Sino-Japan Code and the Representation of Nature: Literature and Art of Japan in the 16th and 17th centuries" (Bensei Press, March 2020) was published as a joint edit with Arata Shimao and Kazuko Kameda.

研究分野：表象文化論

キーワード：自然環境　日本　16世紀　17世紀　文学　表象　故事人物　和漢

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

現在、まさに新型コロナウィルスのパンデミックという事態に人類は翻弄されているが、本研究の開始時期においても、2011 年 3 月に東日本を襲った未曽有の大地震・津波及び原発事故による汚染問題が収束しない中、人文科学は環境問題をどのように引き受けるか、何をすべきなのか、という問いを深く投げかけ続けていた。

このような状況を受けて、近年、小峯和明氏などを中心として、日本古典文学の分野において、古典、東アジアを視野に入れた 「環境文学論」という自然環境と人間社会及び文化との関わりを捉えた文学一般を論じる枠組みが導入されるという注目される動きが出始めていた（『アジア遊学（特集・環境という視座―日本文学とエコクリティシズム）』2011、小峯和明編『日本文学史』2014 の六章「環境と文学」など）。

また小峯氏とともに、この動きの核をなすハルオ・シラネ氏が提唱する「二次的自然」論は、「自然」概念を多層的多元的に把握するための重要な視座を提供した（Haruo Shirane, *Japan and the Four Seasons: Nature, Literature, and the Arts*, 2012）。すなわち日本の文化における自然は、自然そのものを直に対象化するよりも、そこに加工・再編を加えた「二次的自然」を造り、それと暮らしとを調和させることを重視してきたとする主張であり、とりわけ『古今集』以来 の和歌によって四季・風景が記号化され影響を及ぼしたというものである。

また、2017 年の秋学期に、日本学術振興会特別研究員 RPD としてハワイ大学マノア校にて客員研究員をしている中で、アメリカの哲学者のパースの記号論に触れ、記号をアイコン、インデックス、シンボルに三分類した上で、それらを連続的に捉える発想に触れ、「二次的自然」をより多元的に把握する手がかりをことにより、本研究の重要な核となる「コード」の問題への着想に至った。

もちろん、このような高度に分節化された二次的自然の世界のみならず、その向こう側の野生・他者をいかに見出すことができるのかが、同時に問われてもいる。そして、そのような豊かな可能性を孕んだ多層的「二次的自然」とその向こう側をつかみ出すには、今後、さまざまな時・場、メディア、階層に亘り、微視的な基礎作業の積み上げが不可欠となるであろう。その際、頭に浮かんだのが、文学と美術史の相互研究の可能性である。16 世紀の文学と美術史を繋ぐ研究は、近年とみに盛んであり、自身がこれまで研究してきた「故事人物」の分野に限定しても、文学研究の現場から絵画へ橋渡しする資料が次々と発掘されつつあった（中本大による 一連の仙人・二十四孝画題研究、齋藤真麻理による中国類書と絵巻の連関研究など）。美術史からも画題と連歌的発想とを繋げる研究など（島尾新「連歌的世界の図像学」2005）が提出され、室町期における和漢の図像と言葉世界の相互生成のダイナミズムを検討することの 重要さは美術史・文学両分野に共に増していた。このような状況の中で、ハワイ大学で故事人物の画題を研究する美術史家・亀田和子氏に出会い、これまでの自身の専門分野である故事人物を文学と美術史の双方向から照射する中で、自然表象の問題を扱うという構想に至った。

以上のような社会的な状況、学術的背景、さらに人との出会いが合わさることによって、室町から江戸初期にかけての故事人物と自然表象の問題を基盤としながら、言語や文化コードの介在とその可能性を多層的に読み出す共同研究に向かうこととなった。

２．研究の目的

本科研の目的は、自然と人間の関係史を、日本の社会構造・環境的転換期である室町期から江戸初期にかけての時期に注目して、特に文学や美術といった分野から再考する試みである。文学・美術の分野からこの問題を眺めたときに、室町頃から隆盛をみる「故事人物」とともに実に様々な自然物が主題化・絵画化を遂げていく現象が注目される。こうした現象と当時の環境の変化や自然観の変容といったことはどのように関連するのか、また「自然」を表象する際に、古典的な教養いわば文化コード（〈和／漢〉のコード）はどのように働いたのか、といった問題を明らかにすることを目指した。

本研究は、上記のような方法で、室町期から江戸初期にかけての自然観の変容の一端を明らかにすることを通して、人間中心の自然観に対する見直しという現代社会が直面する課題に対し、「近代／前近代」「西欧／日本」という従来の枠組みを基点とせずにこの問題を見据える視座を東アジアから拓くための足がかりとすることが最終目標であったといえる。

3.　研究の方法

近年、人文学では「自然環境」を外在的な要因としてのみならず、「心性」の問題を通じて把握することの重要性が注目され（増尾伸一郎・工藤健一・北條勝貴編『環境と心性の文化史』勉誠出版、2003）、古典文学研究においても、上述のように、近年、東アジアまで視野を広げながら、「環境文学論」（エコクリティシズム）の視座の導入が模索されつつある。本科研もこうした問題意識に連なるものであり、特に再編・再生産されていく「古典知」と「自然環境」とのあいだに立ちあがる「表象」をめぐる様々な問いを多層的・横断的に捉える足がかりを得たいと考えた。

その際、具体的な方法論の参照軸となったのが、ハルオ・シラネ氏の「二次的自然 secondary nature」論である。シラネ氏の前掲の書は、平安貴族による和歌を中心とした自然表現のコード化とその日本文化における影響力の大きさを多方面に亘って論じたものである。このシラネ氏

が提示した言わば「和」のコードの影響力に対し、本研究では「漢」のコードの影響力にも着目し、「和／漢」が拮抗しながら文化に働きかけてきたダイナミズムとして捉え直すという新機軸を打ち出した。

その上で、「和／漢」のコードが、人々が自然を感じ、捉え、表象する際にどのように働いてきたのか、またそこから逸脱するような、「他者」としての自然に触れるということが文学や美術、芸能の作品の中からいかに読み出せるのか、といった問題に対して、特に環境的・社会的な転換期にあたる室町から江戸初期にかけての時期に焦点化して、文学、美術、芸能、歴史といった諸分野から多角的に検討することで、新たな視座を獲得することを試みた。

４．研究成果

本科研は、二年の間に、以上に述べてきたような室町期から江戸期にかけての自然表象にまつわる問題について、文学、美術史など他分野の専門家で議論できる場を作り、闊達な意見交換を行った上で、その成果を公表することを目指すものであった。成果の公表は、第一に、文学・美術史を含む関連分野の研究者によるワークショップを開催すること、第二に、それを論文集として公刊することであった。この目標は、予定通り二年間の期間で達成されたといえる。詳細は以下のとおりである。

2018 年 12 月 23 日、24 日に、東京大学東洋文化研究所にて、ワークショップ「和漢の故事人物と自然表象――十六、七世紀を中心に」を本科研主催で開催した。なお、学習院大学人文科学研究科・共同研究プロジェクト「前近代日本の造形文化における古典知の構築」（研究代表者：佐野みどり教授）と共催という形で協力を得ることができた。本ワークショップは、十六、七世紀の日本に焦点化し、和漢の文化コードと自然表象の問題について文学、美術、芸能、歴史の専門家が 18 名登壇して闊達な議論を交わした。

この成果報告として、ワークショップの登壇者及び海外の研究者をあわせて総勢 18 名の論文をまとめて、島尾新、亀田和子氏との共編という形で『和漢のコードと自然表象――十六、七世紀の日本を中心に』（勉誠出版、2020 年 3 月）を公刊することができた。

本書の構成は、以下の三部からなる。第一部は「「内在化」のかたち」と題して、プライマルな自然（造化としての山水、天、神仙など）との交流への憧憬や神聖視から、中国古代を模倣するような動きにつながる過程を扱う「漢」のコードが強く働く次元を扱う論考、第二部は「コード化した自然」と題して、現実の自然と「漢」と混ぜながら「和」の領域としてより高度にコード化された文化的構築物にしていく過程、またそうした文化コードと在地性の問題を扱う論考、第三部は「人ならざるものとの交感」と題し、これら文化コードとしての自然を借りながらも、逸脱していく側面、まさに他者としての自然に触れる問題を扱った論考をそれぞれ収めた。これらはあくまでも緩やかに分けたものであり、具体的な作品に即しつつ、専門分野を超えた多層的な問いを響かせ合うものとなっている。

今後は、この書籍によって共有できた問題意識や作品の読み解きを基盤として、どのような問題をそこから読み出せるのか、これからどのように展開し得るかといった問いを、個別研究を超えて共に追究していくことであると考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 宇野瑞木	４．巻 244
２．論文標題 江戸時代の寺社建築空間における説話画の展開――西本願寺御影堂の蟇股彫刻「二十四孝図」を中心に	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『前近代東アジアにける〈術文化〉』（アジア遊学）	６．最初と最後の頁 292～307頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宇野瑞木	４．巻 177
２．論文標題 元・郭居敬撰『全相二十四孝詩選』系諸本の成立と展開について	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『東洋文化研究所紀要』（東京大学東洋文化研究所）	６．最初と最後の頁 1～49頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/00079134	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 宇野瑞木	４．巻 246
２．論文標題 二十四孝図と四季表象――大舜図の「耕春」を中心に	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『和漢のコードと自然表象――十六、七世紀の日本を中心に』（アジア遊学）	６．最初と最後の頁 30～45頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 宇野瑞木	４．巻 246
２．論文標題 総論	５．発行年 2020年
３．雑誌名 『和漢のコードと自然表象――十六、七世紀の日本を中心に』（アジア遊学）	６．最初と最後の頁 6～13頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宇野瑞木	4．巻 1
2．論文標題 「室町時代における二十四孝説話の受容と絵画化」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 『グローバル化時代における日本語教育と日本研究』	6．最初と最後の頁 414～426頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 宇野瑞木	4．巻 未定
2．論文標題 「江戸初期の寺社建築空間における説話画の展開――西本願寺御影堂の蟇股彫刻「二十四孝図」を中心に」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『アジア遊学』（水口幹記編『前近代東アジアの〈術数文化〉（仮）』勉誠出版）	6．最初と最後の頁 未定・投稿済
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 宇野瑞木
2．発表標題 The Birth and Development of Japanese Images of The Tales of the Twenty-four Paragons of Filial Piety
3．学会等名 Asian Studies Conference Japan（ASCJ）（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 宇野瑞木
2．発表標題 装飾を超えた装飾の誕生――安土桃山時代の紀州の社寺建築装飾彫刻をめぐって
3．学会等名 さんごの会「未踏の地／知に分け入る」第三回（立教大学）
4．発表年 2018年

１．発表者名 宇野瑞木
２．発表標題 室町時代における二十四孝説話の受容と絵画化――環境文学論へ向けて
３．学会等名 ハノイ大学シンポジウム「グローバル化時代における日本語教育と日本研究」（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 宇野瑞木
２．発表標題 二十四孝図と四季表象――大舜図の「耕春」を中心に
３．学会等名 ワークショップ「和漢の故事人物と自然表象」（東京大学東洋文化研究所）
４．発表年 2018年

１．発表者名 宇野瑞木
２．発表標題 The Reception and Development of The Tales of the Twenty-four Paragons of Filial Piety in Japan
３．学会等名 PKU-UTokyo Joint Program of East Asian Studies Launching Conference & Young Scholar Workshop（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 島尾新、宇野瑞木、亀田和子	４．発行年 2020年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 272
３．書名 和漢のコードと自然表象――十六、七世紀の日本を中心に	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考